

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 崔先生の思い出   |
| Author(s)  | 山田, 寛人  |
| Citation   | アジア社会文化研究 , 24 : 66   |
| Issue Date | 2023-03-31  |
| DOI        |   |
| Self DOI   |   |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053974">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053974</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



## 崔吉城先生を偲んで

### 崔先生の思い出

山田 寛人

崔先生を知るには時間がかかった。指導学生としてお世話になった4年間は、先生がどんな人なのか今一つよくわからなかった。卒業後、数年間はほとんど連絡をすることもなかった。先生の方から何度も声をかけていただいたが、ほとんどお断りしていた。それでも私のことを気にかけて下さっていたのか、何年たっても何度でも声をかけ続けて下さった。

そんな状況が続いていた中で、ある時、ふと先生の言うことを聞いてみようという気になり、久々にお会いした。それからは徐々に先生の魅力を実感するようになった。仕事や研究の関係で訪ねることもあったが、何の用事もなしに先生の研究室に押し掛けることも増えた。いつ訪ねても歓迎された。先生の研究室は私にとって居心地の良い訪問先の一つになった。

私と先生との関係は客観的に見れば、師弟関係ということになるのだろうが、そのような関係は無視して対等な人間同士の関係を意識してお付き合いができた。先生は、そういう私の気持ちをそのまま理解して受け入れて下さる人だったと思う。先生が私のことをどう思っているのかという話はまったく聞いたことはないが、その時その場で話した内容についてはいつも率直に批評して下さった。それを繰り返すことで、良いコミュニケーションが取れていると感じることができた。

先生が毎日書くフェイスブックの記事も楽しみの一つだった。私はどんなことに対してもいい加減にやり過ぎ、なるべく真面目に取り組まないようにしているが、先生の日記のスタイルには強い感銘を受けた。先生が書いているものを実際に読むことを通して、毎日書くことの意味を感じるようになった。自身が置かれている状況がどのような時であっても、必ず毎朝、心を落ち着けて文章を書くということの意味がよく伝わってきた。数年前から、先生のスタイルをまねることにしてそれを続けている。なかなか筆が進まな

い時には特によく先生のことが思い浮かぶ。こういう時にも先生は書き続けていたのだなと思うと、親近感がわいてくる。

今度お会いしたらこういう話をしたい、こういうことをしたいというのは、まだあれこれ残っていたが、それでも先生との出会いを通じて得られた交流の時間は十分に満喫できた。どんなことでも、少し足りないくらいがちょうど良い。先生が亡くなっても、先生が存在が消滅したわけではない。このような文章が書けること自体、先生が存在が私の中で生き続けている証拠だ。先生、ありがとうございました。